

九州沖縄農業研究センターニュース No.2

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24514/00007801

九州沖縄農業研究センター ニュース

No.2

2001年12月



参観者との交流



好評な試食コーナー



人気を集めた動物たち



子供も掘り体験

九州沖縄農業研究センターの一般公開（平成13年11月10日（土）開催）

詳しくは本誌6頁を参照ください。

● 主な記事 ●

- 巻頭言 南西諸島における農業研究の推進
- 研究成果の紹介
 - ・省力的な飼料生産に貢献する播種法の開発
 - ・電磁波を用いた土壌水分測定技術の九州沖縄地域の農地土壌への適用
- 九州沖縄農研の動き
 - ・農業分野におけるIT利用の成果と今後の展開

- ・21世紀を担う新品種・新技術の数々
- 海外見聞
 - ・オーストラリア見聞記
- 研修雑感
- 諸会議・研究会の日程
- 人のうごき

南西諸島における農業研究の推進

沖縄農業研究官 宮重 俊一

九州沖縄農業研究センター発足

当センターは、平成13年4月1日の独立行政法人への移行にともなって、所名に「沖縄」を明記するとともに、沖縄農業研究官というポストを新設、さらに企画調整部研究交流科に沖縄業務係を配置した。これとともに総合研究部の南西諸島農業研究官は南西諸島農業研究チームとして再編した。こうして、当新センターは、九州本土とは明らかに諸事情、諸条件の異なる沖縄地域（南西諸島）の農業研究を推進するに当たり、これまでより一歩進めた研究推進体制を整えた。

南西諸島関連研究課題

現在、南西諸島農業研究チームは、野菜花き部を初めとする各部の協力のもと、沖縄県と連携を取りながら地域先導技術総合研究「亜熱帯における野菜・花き導入による高収益農業技術の確立」(平成10年～14年)に取り組んでおり、イチゴの新規導入栽培、種なしスイカの作出、カーネーション等の開花調節による需要期出荷等を実証した。

また、沖縄農業研究官は、国の新たな沖縄県振興策を受けて今年度から始まった沖縄対応特別研究「亜熱帯ウリ科野菜、果実における品質・機能性成分の評価と利用技術の開発」(平成13年～15年)の研究推進に当たることになった(概要はセンターニュースNo.1に掲載)。

一方、当センター作物機能開発部にはさとうきび育種研究室(種子島)がある。サトウキビは島嶼地域の基幹作物といわれ、事実、その栽培面積は、沖縄県では全耕地面積の51%にも達する(平成8年)。栽培農家は総農家戸数の72%と、さらに高い。当研究室では、新規形質を備えたサトウキビ系統・品種の育成を中心に、幅広い研究活動を行っている。

以上を含め、南西諸島に係わる研究課題は多い。**もっと南西諸島の農業を知ろう**

とはいえ、南西諸島は当センターから遠く離れていること、さらに何よりも、南西諸島は亜熱帯に属し、特有の気象、生物、土壌等の条件を有しているため、農業における技術上の問題点が九州本土とは大きく異なるということが、これまで南西諸島へのアプローチを少し難しくしていた面がある。南西諸

島における農業研究のアイデアはやはり現地における経験や交流をとおして育まれる。その意味で、同地域とはいろんなレベルでパイプをつなぎ研究交流を図っていくことが重要である。研究者の専門における関心も、違った環境のもとに置き直すともまた新たな展開の方向が見えてくるのではなかろうか。こうした交流を通して新たな研究シーズの発掘、培養を期待したい。独立行政法人となり、研究費の使い方にも少し融通が付けられるようになったことは幸いである。

南西諸島から世界へ

沖縄は、来年(平成14年)復帰30年の節目を迎える。同県では今年、新たな沖縄の振興新法、振興新計画の策定に向けた「基本的な考え方」を取りまとめた。この中で、同県は、従来掲げてきた本土との「格差是正」から、自県経済の「自立・発展」に向け舵を切った。いわば視線を東京から自分たちの足元に戻したといえる。さらに同県は、その立地から、アジア・太平洋地域における交流の拠点たらんことも謳った。

健全な農業・農村の発展は、こうした島嶼社会の基盤である。そのために、1) サトウキビ農業の新しい展開、2) 地産地消の取り組み推進、3) 地域の優位性を活かせる部門の強化一等を一步も二歩も進める必要があり、今後も一層の技術支援が求められよう。もちろん、その取り組みには、島の環境や資源、農村の景観、文化等への配慮が必要なことはいうまでもない。上述したように、当センターの南西諸島における農業研究の推進には、パートナーとして地元県の協力、参画が欠かせない。そればかりか今後は広く産学官の連携を図っていく必要がある。そして、南西諸島から近隣諸国、さらに世界へとネットワークを広げていきたいものである。



研究成果 1

省力的な飼料生産に貢献する播種法の開発

はじめに

従来の飼料作物の播種では、プラウ→ロータリー→施肥→ロータリー→播種→覆土→鎮圧の作業を要し、各作業が一工程ずつ実施され多労であり、高コストの一因となっている。播種作業の省力化は、低コスト飼料生産において重要な課題である。

そこで、当研究室では、耕耘・施肥・播種・覆土・鎮圧まで一工程の作業を行う部分耕型や、作溝型の簡易播種法の開発に取り組んでいる。

部分耕型播種法

畝間用の中耕ロータリー（耕耘幅30cm）と施肥播種機を一体化して、主にスーダングラスやトウモロコシの夏作栽培のための播種法として開発した。更に、この技術の汎用性を高めるために畦幅60cm、耕耘幅20cmの専用播種機を開発し、冬作の大麦類と夏作のスーダングラスに適用できることを明らかにした。この播種法では、条間にスラリーを土中注入し、スラリーの有効利用を図れる。

作溝型播種法

この播種法は、市販の稲・麦の不耕起播種機（M社）を飼料作物の播種に応用するものである（写真1）。播種ロール方式のロールを改良し、ギニアグ



写真1. 改良播種ロールを用いた作溝型播種機
種子ホッパー直下の改良播種ロールの溝穴に入った種子は、播種導管からアップカットロータリーで削られた土中の作溝部に落下し、ロータリーで掻き上げられた土で覆土される。その直後に、施肥と鎮圧が行われる。

ラスなどの小粒種子（千粒重1g程度、長径2mm）を適量の10a当たり約1kg程度播種できる。小粒のギニアグラスからスーダングラスや麦類までの播種が可能である。この播種法は、播種ロール（特別注文）を購入するだけで現有機械を活用できるので低コスト化にも貢献できる。現在、イタリアンライグラスの播種法を飼料畑や飼料イネ水田の裏作で検討中である。

現地実証の例

作溝型播種法で酪農家のイタリアンライグラス跡にスーダングラスを栽培した例である。我が国で育成された「ヒロワン」の7月末播種の試験で、写真2のように定着は安定し、乾物重で500~1000kg/10aを収穫できる。



写真2. 作溝型播種法でのスーダングラスの草勢
供試品種ヒロワンを7月31日に播種。収穫時（10月3日）草丈は約2.5mに達している。

おわりに

我が国の近年の飼料作物作付面積は、横這い傾向からやや減少傾向にある。畜産農家が自給飼料生産に努め、健全な牛を飼養できる経営の確立が望まれる。そのための技術のひとつとして、本播種法が活用されることを期待したい。

（畜産飼料作研究部飼料生産研究室長 佐藤健次）

研究成果 2

電磁波を用いた土壤水分測定技術の九州沖縄地域の農地土壤への適用

はじめに

農地土壤の保水性は、灌漑用水計画だけでなく、作物の生育環境を良好に保ち、環境保全型農業を行う上でも、重要な土壤の持つ機能である。特に、九州沖縄地域の激しい気象変動下で生じる土壤水分の変動は、作物生産上の不安定要因となっている。土壤の保水性の評価は土壤水分測定によって行われる。これまで電磁波を用いた迅速で高精度な土壤水分測定技術の九州沖縄地域の農地土壤への適用性を検討してきたので、これを紹介する。

電磁波の伝達速度と土壤水分量の関係

電磁波を用いた土壤水分の測定は、電磁波の伝達速度を測定して土壤水分量に換算する計測方法である。九州沖縄地域の代表的な畑土壤である黒ボク土、赤黄色土、褐色森林土、対照として砂を供試し、電磁波の伝達速度と水分量の関係を調べ、一般によく用いられる伝達速度と水分量の関係式を土壤間で比較した(図1)。この関係式は砂や褐色森林土では

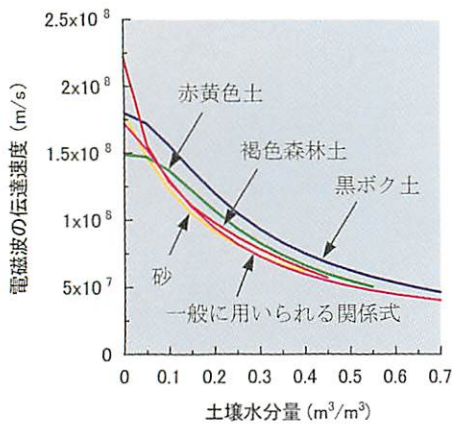


図1. 九州沖縄地域の土壤の電磁波伝達速度と土壤水分量の関係

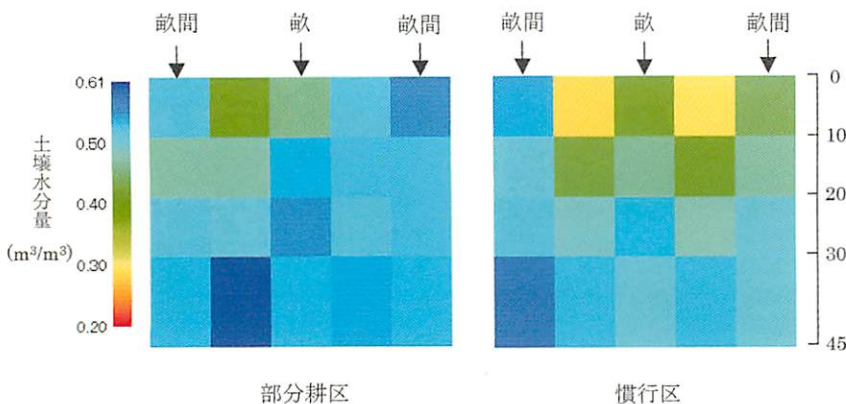


図2. 栽培試験圃場での土壤水分測定例

部分耕区は播種を行なう畝部の幅30cmの範囲のみを耕した区、慣行区は圃場全面を耕した区である。降雨後4日目の作土層内の水分分布を示している。慣行区では畝と畝間の間を中心に土壤乾燥が始まる様子がわかる。

よく適合したが、赤黄色土では水分量の増加とともに5%前後ずれた。黒ボク土は一番ずれが大きく、独自の関係式を求める必要がある。特に黒ボク土については、これまでに西合志、都城および筑波に分布する土壤で比較検討を行ったところ、ほぼ等しい関係を得た。したがって、予め土壤ごとに関係式(較正式)を求めておけば、汎用性のある計測法であること、土壤間で関係式が異なる主な原因は、乾燥密度と粘土や有機物に吸着されている水分量の違いであることを明らかにした。

栽培試験圃場での土壤水分測定例

種々の栽培試験が行われている状況下で土壤水分環境を把握する手法を開発する際に、土壤のち密度の違いが土壤水分測定に影響を及ぼすと考えられる。土壤の乾燥密度ごとに関係式を求める必要があるかどうかを検討した結果、黒ボク土の場合、乾燥密度が0.67~0.80の範囲で変動しても、測定誤差の範囲内に収まることが明らかとなった。この結果をもとに、センター内で行われている部分耕区と慣行区を設けた栽培試験圃場を対象に電磁波による土壤水分測定を行った例を図2に示す。耕うん法の違いが土壤水分環境の違いを生じさせていることが明らかである。

おわりに

環境保全型農業技術を開発していくなかで、農地からの環境負荷物質について定量性の高いモニタリング手法の開発が必要不可欠となっている。今回紹介した土壤水分測定技術を作土層における溶質フラックスモニタリングシステム構築に応用していく予定である。

(環境資源研究部資源評価研究室 宮本輝仁)

九州沖縄農研の動き

農業分野におけるIT利用の成果と今後の展開
—平成13年度九州沖縄地域農林水産業研究成果発表会—

独立行政法人化後初めての九州沖縄地域農林水産業研究成果発表会（共催：農林水産技術会議事務局・九州沖縄農業研究センター・九州農業試験研究機関協議会・佐賀県、協賛：九州農政局、農林水産技術情報協会）が、「農業分野におけるIT利用の成果と今後の展開」のメインテーマの下に、平成13年9月26日にアバンセ（佐賀県女性センター・生涯学習センター）で、286名の参加を得て盛会裡に開催された。

はじめに、**基調講演**として中央農業総合研究センター農業情報研究部の木浦卓治主任研究官から、「農業情報の分散共有と再統合」と題して、農業分野において多方面に分散している情報を有効に活用するための手法開発について、中央農業総合研究センターにおける研究を事例に現状と将来方向が紹介された。

次いで、**研究成果発表**では以下の4課題が紹介された。

- 1) 「気象ロボットを活用した農業気象情報の提供とその利用」として、大分県農業技術センター企画情報部の漆間徹研究員から、県内16か所に設置した気象ロボット等を活用した気象情報の収集・提供システム及びインターネット対応による各種農業情報提供システムの開発状況が紹介された。
- 2) 「地図情報を用いた営農計画支援システム」として、佐賀県農業試験研究センター企画流通部の馬場崎一俊専門研究員から、集落を単位とした営農計画の策定や組織化あるいは担い手への農地の集積等を目的に、農家・農地情報等と地図システムを結合した営農計画支援システムの開発経過が紹介された。
- 3) 「営農支援技術情報とその提供」として、佐賀県農業試験研究センター企画流通部の重富修特別研究員から、病虫害診断、文献情報検索、メッシュ気候値を利用した生育予測、栽培管理マニュアル等、農家段階における意志決定を支援するための技術情報提供システムの開発状況が

紹介された。

- 4) 「リモートセンシングによる乳牛の省力的・精密飼養管理技術」として、福岡県農業総合試験場畜産研究所大家畜部古賀康弘乳牛研究室長から、リモートセンシングによる個体情報収集に基づき、コンピューター管理により省力的かつ精密に個体飼養管理を図るためのシステムの開発経過が紹介された。

さらに、**話題提供**として九州沖縄農業研究センター総合研究部生出真里研究員から、「さまざまな対象に適用できる植物形状判別モデル」と題して、育種、遺伝資源評価、栽培試験等における草姿や葉型等の形態情報について、従来からの目視判別から脱却して客観性・一体性を持たせるためのモデル開発の成果が紹介された。

これらの発表を踏まえ、**総合討論**では今後九州沖縄地域において取り組むべき研究開発の方向等について活発な議論が交わされた。また参加者へのアンケート調査では、共同研究等により限られた研究勢力を最大限に活用することの必要性、研究成果を農業生産現場に活かすための方策、今後研究成果発表会で取り上げて欲しい課題等、数多くの有意義な意見が寄せられた。なお、次年度の研究成果発表会は平成14年9月18日に長崎県・諫早市において開催する予定である。

（企画調整部研究企画科長 望月龍也）



発表者を中心にした総合討論

21世紀を担う新品種・新技術の数々 —九州沖縄農業研究センター 一般公開—

メインテーマ“自給率アップ！—新技術で安全・安心な国内農産物を—”を掲げた平成13年度の一般公開が、11月10日(土)に九州沖縄農業研究センター西合志キャンパスで開催された。すっかり地域に定着した年中行事になっているが、独法化後としては最初である。前年度よりも早めた開場時間を待たずに、早朝からたくさんの来場者で賑わった。

上記メインテーマの下に、最新の研究成果情報を提供する展示会場のほか、講演会、体験・試食・展示即売などの催しをほぼ例年通り設置した。

以下、それぞれのコーナーを簡単に紹介する。

展示会場：小麦等の新品種紹介など作物の品種改良から利用までも含めた技術開発の数々、西南暖地に適した畜産飼料作の新技術、土壌微生物の機能や土壌の諸性質を生かした環境調和型の土壌管理技術、九州沖縄地域に発生する各種病害虫とその対策、インターネットで見られる市町村別の気象図などのほか、筑後・都城・久留米の各キャンパスからの展示等について、来場者には担当者から分かりやすく丁寧な説明が行われていた。また、今年も隣接の機関からパネル、資料等多数の協賛展示を受けた。

講演会会場：“21世紀を担う新品種・新技術”と題する講演会では、ピーク時には準備した椅子が足りなくなるほどの盛況であった。イチゴ、小麦、飼料イネ、大豆の4品目についてそれぞれ新品種育成、栽培のポイント、機能性を生かした利用法などの話題が来聴者に分かりやすく説明された。例年に比べて生産者の参加が多く、進行が気になるくらいに熱

心な質疑応答があり、また、休憩時には講演テーマに因んだ試食品も配布され、大変好評であった。

体験コーナー：屋外では、小学生以下を対象にしたいも掘りや、大型農業機械展示と同時に牧草のラッピングの実演とそのロールペールへのお絵かきは大変な人気であった。台風並みの風速を肌で感じてもらう暴風体験コーナーでは子供達の歓声が弾んでいた。室内では、家庭の飲料水水質を検査するコーナーには多数の検体試料が持ち込まれていた。

試食及び展示即売コーナー：当所育成小麦「イワイノダイチ」のうどん、同「ニシノカオリ」の食パン、甘しょ天ぶらの試食には昨年度の好評を持続して多くの方が列をなし、アンケート調査にも好意的に協力されていた。そのほか当所育成の紫イモジュース、おいものプリン、新鮮な牛乳、バター、ヨーグルトの試飲・試食も大好評で例年通りの賑わいであった。さらに大豆エルスターの粉末製品・豆乳・豆乳アイスクリーム・スポンジケーキなど当所育成品種による試食品を多くの方が味わい、アンケート調査に答えておられた。

当所が長年かけて開発してきた研究成果を直接見たり、聞いたり、触ったり、味わったりして、来場者自らの体験を通して、当研究センターの存在を五感で認識してもらえたものと思う。その締めくくりとして、出口ではお土産と引き換えにこのイベントの感想などをアンケートに記入していただいた。本年の来場者は1,369人であった。

(西合志地区 一般公開実行委員長 金森哲夫)



生産者の参加が多かった講演会場



好評なニシノカオリ食パンの試食と即売コーナー

海外見聞

オーストラリア見聞記

2000年11月28、29日の両日にわたり、オーストラリアのメルボルン大学で開催された「Australasian Workshop on Anthocyanins 2000」に出席した。参加者はオーストラリア、ニュージーランドおよび日本から、アントシアニン色素の研究者および関係者で、約40名であった。日本からは山川部長、吉永主任研究官が共に参加した。部長は「日本における紫サツマイモの育成」、吉永主任研究官は「サツマイモペーストの色調に及ぼすアントシアニン色素の影響」、筆者は「サツマイモアントシアニンの機能性」について報告した。本シンポジウムは今後サツマイモを含めた植物アントシアニン色素の研究を日本及びオーストラリア、ニュージーランドの研究者が共同で推進していくための意見交換の会議でもあり、発表内容は色素の合成メカニズムから機能性にわたり、活発な意見交換がなされた。機能性の発表については我々だけであった。オーストラリアおよびニュージーランドの研究は色素合成のメカニズムおよびその実用化に関する研究が主体で機能性についてはほとんど研究されていないのが現状のようである。

今回のオーストラリア訪問のもう一つの目的はCRCバイオプロダクツ共同研究センターと当畑作研究部とのサツマイモのアントシアニン色素に関する共同研究の打ち合わせである。場所は植物のカルスを培養し、有用成分の研究開発を実施している工場で見学をかねて行われた。植物のカルスをタンクで培養して有用成分を製品化する工場を見学した。このような培養システムを見学したのは初めてことで、圧巻であった。外国と共同研究を実施することは、当方にとっては初めてのことであり、外国語で共同研究の契約等が行える専門家（相手方には専門家が出席していた）が今後必要であると痛感した。今回はもっぱら部長が交渉に当たったが、良く善戦したと思う。

シドニーではフードサイエンスオーストラリアの研究所を訪問した。ここでは、依然当研究部の遺伝資源利用研究室で紫サツマイモのカルスの研究をしていたイザベラ博士（今回の会議の世話人の一人）が勤務している。この研究所は、カルス培養による有用成分の利用に関する基礎的研究から作物の加工・利用に関する研究が積極的にすすめられていた。



フードサイエンスオーストラリア研究センターで
左から、吉永主任研究官、イザベラ博士、筆者、山川部長、フィル博士

メルボルン市内の健康補助食品の販売店に行く機会があったが、抗酸化成分を主体とした製品やミネラル等サプリメントが所狭しと並べてあった。オーストラリアは南極に近く、オゾン層の破壊による紫外線の影響が懸念されていることをテレビで聞いたことがある。抗酸化に関する製品の需要が多いということは、このような事とも無関係ではないのかも知れない。しかし、アントシアニンなど色素を利用した製品は皆無であった。

薄ら寒い日本から、夏のオーストラリアを訪問したが、クリスマスの約一月前である。ホテルや至る所でクリスマスツリーを目にしたが、クリスマスはホワイトクリスマスで寒い時期という概念がしみ込んでいる筆者にとっては奇異に感じた。シドニーでは、市の中心にある公園で日本人主催の夏祭り、カラオケ大会や踊り、売店等あり、多くの人々が楽しんでいたが、その公園内には大きなクリスマスツリーがあった。夜は花火大会である。

今回のオーストラリア訪問は共同研究推進のための打ち合わせもあり、何かと大変であったが、サツマイモの新たな用途の一面およびさらなる可能性を知ることができ大変有効であった。

（畑作研究部畑作物変換
利用研究室長 吉元 誠）



夏のクリスマスツリー

研修雑感

貴重な経験、研究に生かしたい —平成13年度新規採用研究職員研修—

独立行政法人化後最初となる平成13年度新規採用研究職員研修は、機構本部からの「各研究所の創意によって実施すること」という指示に基づき、当センターとしては従来の研修方針を踏襲して実施した。本年度の研修対象者は、企画調整部配属の5名+選考採用の1名、計6名である。当センターにおける研修は、総務省及び農水省で主催された合同初任者研修後の4月23日から始まった。

【全体研修】

高木理事の講話をはじめ、各部の業務・研究内容の説明や実習を通して、これから研究職員として業務を遂行する上で必要な知識を身につけるとともに、当センターへの理解を深めた。また、各種研究会への参加や営農現場の見学、農家実習などを通して、農業の実際と農業を取りまく諸問題について認識を深めた。特に、熊本県下の先進農家で実施された1週間泊まり込みでの農家実習では、これから各自が地域農業研究センターの一員として農業現場へ、そして農家へどのように貢献できるのかということ深く考えさせられたようだ。

【個別研修】

西合志内各部の研修が一段落した5月16日からは、選考採用者を除く5名について本来の専門分野とは異なる研究室等へ仮配属した。仮配属先では、それぞれにテーマを与えられ、自分で勉強して考え、結果を議論し、研究現場の実際を経験した。そして7月31日、研修報告会で仮配属先での研究について発表するとともに、研修の総括を行った。研修報告会へは、実習でお世話になった農家の方々も多数駆けつけ、新人達に向けられた期待の大きさを伺わせた。

この4か月間の研修は、「研究をしたい」という意欲に駆られた新人達にとっては、さぞかしもどかしいものであったに違いない。しかしながら、農家に泊まり込んで汗を流して働いた経験や、それまで触れることのなかった異分野の研究者との交流は、これからの研究生活を歩んで行く上で、きっとかけがえない宝物になると信じている。

最後に、本研修でお世話になった各位に、この場をお借りして感謝申し上げる。

(研究企画科主任研究官 住吉 正)

遠藤 信幸 (地域基盤研究部)



新人研修においては各研究室や農業に係っている方々から直接話を伺うことができ、現在の農業が抱える問題点や現場の大切さを知ることができた。また、農家研修では実際に農作業を体験することにより“農業”の大変さを実感することができた。これらは普段めったに経験することができないことばかりであり、非常に貴重な体験だったと思う。今後はこれら研修で得られたことを生かし、常に生産者や消費者を意識しながら研究を行っていきたい。

平野 清 (畜産飼料作研究部)



新人研修で受けた場内すべての仕事の説明は、大勢の方々の様々な仕事内容と共に個々の立場・価値観・思想・趣向が凝らされており良い勉強となりました。仮配属期間は病害生態制御研究室の皆様のおかげで、大変楽しく過ごすことができました。農家研修ではこれまでに経験したことない牛との生活についての基礎を学ぶことができました。全ての経験が今の私に役立っています。皆様へ感謝すると共に、これから先もよろしく願いいたします。

嶋谷智佳子 (畜産飼料作研究部)



4か月の新人研修で、見たり聞いたり、体験したりしたことは、私にとっては何もかもが初めてのことばかりで、毎日がとても新鮮でした。なかでも、ミニトマト農家での4泊5日の農家研修は、大変印象に残りました。ハウスの中での作業は、想像以上に厳しいものでしたが、農家の方々と、ゆっくりお話をすることができ、共感したり刺激を受けるところがたくさんあって、とても勉強になりました。これらの貴重な経験を、これからの研究生活に役立てていきたいと思えます。

山口 博隆 (野菜花き研究部)



ほとんどすべての研究室を訪問して、研究内容を知る機会を与えられ、九沖農研の皆さんと面識を持つことができたことは大変ありがたかったです。農家研修では、5日間にわたってお世話になり、研究室や試験圃場では得ることができない経験をすることができました。現在は、野菜花き研究部で、ニガウリなど野菜の栽培試験をしています。まずは、野菜を上手に作ることが課題です。早く看板になるような仕事ができるようにがんばります。

阪谷 美樹 (畜産飼料作研究部)



4月の半ばに着任してから半年が過ぎました。研修中は様々な体験をしましたが時間が経つのが非常に早かった気がします。各研究部での研修では専門と異なる分野について知ることができました。また仮配属でお世話

になった大豆育種研究室では、植物を対象とした研究で慣れないことも多かったのですが、動物とは違った見方や考え方を知ることができました。今後は家畜の繁殖を研究していくこととなりますが、研修で学んだことも生かしつつ頑張っていきたいと思っています。

上田 重文 (地域基盤研究部)



地域基盤研究部 病害遺伝子制御研究室に配属になりました、上田 重文(しげのり)です。出身地は茨城県日立市、大学卒業以後、札幌→石狩→札幌→つくば→札幌→春川(韓国 江原道)→札幌と転居(転職)を重

ね、4月から晴れてここ西合志町で腰を据えて植物ウイルスに関する研究ができることになりました。現在の主な研究テーマは、ジェミニウイルス病の防除、診断技術の確立です。どうぞよろしくお願い致します。

お知らせ

平成13年度 九州沖縄農業試験研究推進会議日程

会議(部会)名		開催日	開催場所	出席 予定者
本会議		14年2月1日	九州沖縄農研(西合志)	90名
推 進 部 会	水田作推進部会	14年2月14日	九州沖縄農研(筑後)	40名
	畑作推進部会	14年2月13日	九州沖縄農研(西合志)	80名
	畜産・草地推進部会	14年2月6～7日	九州沖縄農研(西合志)	70名
	果樹推進部会	14年2月12～13日	長崎県大村市	30名
	野菜・花き推進部会	14年2月6～7日	九州沖縄農研(久留米)	70名
	茶業推進部会	14年2月7～8日	野菜茶研(金谷)	30名
	病害虫推進部会	14年2月13～14日	九州沖縄農研(西合志)	50名
	生産環境推進部会	14年2月8日	九州沖縄農研(西合志)	40名
	農業機械・土木推進部会	14年2月8日	九州沖縄農研(都城)	40名
	農業経営推進部会	14年2月8日	九州沖縄農研(西合志)	35名
	流通加工推進部会	14年2月13～14日	九州沖縄農研(西合志)	50名
	植物バイオテクノロジー研究推進部会	14年2月8日	九州沖縄農研(西合志)	50名
情報研究推進部会	14年2月13日	九州沖縄農研(西合志)	30名	
評価企画会議		14年2月15日	九州沖縄農研(西合志)	75名

人の動き

表彰

氏名	所属	表彰名	表彰日	功績
種子島試験地 (さとうきび育種研究部門)	作物機能開発部 さとうきび育種研究室(種子島)	人事院総裁賞 (職域部門)	H13.12.5	さとうきびの優良品種の育成により、南西諸島における産業振興に貢献しており、公務の信頼の確保と向上に寄与した
吉武 貞雄	元九州農業試験場水田利用部 業務科総括作業長	勲六等瑞宝章	H13.11.1	長年にわたり農業試験研究の発展に寄与した

海外出張

氏名	所属	用務	期間	用務先
田中 章浩	畜産飼料作研究室 畜産総合研究チーム	アメリカ農業工学会	H13.7.29～ 13.8.2	アメリカ
石黒 浩二	畑作研究部 サツマイモ育種研究室	ジーンバンク事業の開発途上国生物遺伝資源共同調査(インドネシア 甘しょ)におけるワークショップ	H13.9.30～ 13.10.5	インドネシア
市瀬 克也	地域基盤研究部 害虫生態制御研究室	フランス政府給費留学生	H13.10.3～ 14.9.30	フランス
岩間 裕子	畜産飼料作研究室 環境生理研究室	タイにおける乳牛のカルシウムの代謝特性と動態調査(JIRCAS 東北タイ)	H13.10.16～ 13.11.16	タイ
柏尾 具俊	野菜花き研究部 上席研究官	パラグアイ小農野菜生産技術改善計画終了時評価調査団員(JICA 育種/野菜栽培/病害虫)	H13.10.21～ 13.11.3	パラグアイ
森田 弘彦	水田作研究室 水田作総合研究チーム	直播水稲の雑草防除(JIRCAS:東北タイ)	H13.10.21～ 13.11.10	タイ
松村 正哉	地域基盤研究部 害虫管理システム研究室	中国における移動性イネウカ類の総合管理技術の開発(JIRCAS 中国食糧)	H13.10.25～ 13.11.1	中国
平野 清	畜産飼料作研究室 草地管理利用研究室	国際学会(The Fish IFOAM-Asia Scientific Conference and General Assembly)	H13.10.31～ 13.11.5	中国
久保寺秀夫	環境資源研究部 土壌資源利用研究室	フィリピン・農民参加によるマージナルランド環境及び生産管理短期派遣専門家(土壌分類・情報解析)	H13.11.8～ 13.12.7	フィリピン
松村 正哉	地域基盤研究部 害虫管理システム研究室	東アジアにおけるトビイロウンカの国際発生予測システムと管理に関する第3回RDA/FAO共同ワークショップ	H13.11.12～ 13.11.16	ベトナム
塩谷 繁	畜産飼料作研究室 環境生理研究室	インドネシアにおける稲わら等の未利用飼料資源の有効活用の可能性についての調査(畜産技術協会からの要請)	H13.11.13～ 13.11.24	インドネシア
和田 節	地域基盤研究部 害虫生態制御研究室	ドミニカ共和国灌漑農業技術改善計画に係る短期専門家(栽培)	H13.11.21～ 13.12.19	ドミニカ共和国
西 和文	地域基盤研究部 上席研究官	南米における大豆病害の実態解明(JIRCAS 南米大豆)	H13.11.26～ 13.12.23	パラグアイ ブラジル アルゼンチン
田中 章浩	畜産飼料作研究室 畜産総合研究チーム	堆肥化、乾燥等の過程におけるアンモニア揮散量の定量化及び揮散抑制技術の確立を図るための研究(アイオワ州立大学からの要請)	H13.12.1～ 14.5.31	アメリカ

受け入れ研究員

氏名	種別	研究課題	受入研究室	期間
Joshi Ravindra Chandra	JSPSフェローシップ長期	侵入生物スクミリンゴガイが環境ストレスの異なる熱帯と温帯でどのように進化したかを比較研究する。	地域基盤研究部害虫生態制御研究室	H13.10.28～ 14.8.27

依頼研究員

氏名	所属	受入課題名	受入研究室	期間
石井 貴明	福岡県農業総合試験場 生産環境研究所	野菜類に発生する侵入ウイルスの診断技術の習得	病害遺伝子制御研究室	H13.9.3～ 13.11.30
松本 武彦	北海道立中央農業試験場	家畜排泄物堆肥及び各種有機物の肥効特性の解明	水田土壌管理研究室	H13.9.17～ 13.11.18
宮元 史登	富山県農業技術センター	敵表面硬化法に関する技術の習得	畑作総合研究チーム	H13.10.22～ 13.11.2
山戸 陸也	熊本県農業研究センター 球磨農業研究所	麦類の品質評価法	麦育種研究室	H13.12.1～ 14.2.28